書評論文

シカゴ社会学と都市エスニシティに関する一考察
——秋元律郎著『現代都市とエスニシティ シカゴ社会学をめぐって』をもとに——
（早稲田大学出版部、2002年）
水上徹男

1 はじめに

20世紀のアメリカ合衆国を中心とした社会学の発展に、シカゴ大学社会学科が多大な
貢献をした。ことに、第一時大戦後から1930年代半ばにかけての成果には目を覚ますもの
があった1）。アメリカ合衆国において社会学の最初のテキストとして幅広く受け入れら
れた通称「グリーン・バイブル」も、パーク（R.E. Park）とバージェス（E.W. Burgess）
の編纂で1920年代初期に刊行されている。エスニシティのイッシャーが主要な研究領域
のひとつとして確立している現代の社会学で、その当時に示された理論や視座はいまだに
影響力があり、文化人類学の方法論を都市研究に適用した実証的手法は現在でも受け継が
れている。この数年の間にも本書『現代都市とエスニシティ』を含めて、シカゴ社会学
にたいする批判や再検討した研究論考が発表されており2）、グローバル・マイグレーション
の注目点が高まった1980年代半ば以降、都市社会を舞台としたエスノグラフィックな
調査も再評価されるようになってきた3）。参与観察法に基づき、対象となる生活世界を描
き出してきたシカゴ・モノグラフについては、国内でも1990年代になって翻訳のシリー
ズが刊行されるに至っている4）。

本書は、『現代都市とエスニシティ』の分析に関して、エスノグラフィックな調査の蓄
積を主要な考察対象とするのではなく、全9章のうち7章までが第二次世界大戦以前の
シカゴ学派の議論や当時の社会情勢等の考察にあてられている。特定の時代の主な理論を
中心に考察した理由は、これまでの都市エスニシティ研究において、「理論的な展開の道
筋を経験的分析の成果と突き合せていく作業は、けっして十分とはいえなかった」[秋元
2002：4]という著者の批判的な見解に示される。なかでも人種あるいはエスニック集団
のホスト社会へのかかわりの分析に洞察の深いトマス（I. Thomas）やパークの理論およ
び経験主義的な調査にたいする姿勢を重点的に取り上げた。本稿では、『現代都市とエス
ニシティ』の構成に準じて、いくつかの論議について検討することを試みる。本書で扱っ
たシカゴ社会学を取り巻く人物や人間関係、社会情勢および個々の研究者の視座や概念の
すべてを網羅して紹介することはできないが、主要な対象となったものを概観した後に、評者なりの考察を加える①。

2 「視座と方法の形成」

三つの章で構成される第1部「視座と方法の形成」の第1章は、ソーシャル・ワークとの深いかかわりのなかで発展するシカゴ社会学の萌芽期に注目して、当時のシカゴ社会学を支えた関与者の貢献などを明らかにした②。第一世代にあたるスモール（A.W. Small）やヘンダーソン（C.R. Henderson）の時代は、社会改良主義者たちとの交流のなかで都市の社会問題と向き合っていた③。しかし、著者が指摘しているように、科学的、理解という立場での経験的調査に関しては、第二世代に範疇化されたトマスやパークの都市研究の登場まで持ちこされるようになる。ここでは、社会調査を進めるにあたって、倫理や道徳観念が強く影響していた状況がソーシャル・ワークとのかかわりとともに指示される。同時にシカゴ社会学の発展に、「ハル・ハウス（Hull House）」が深く関与していたことと例証された④。実際ハル・ハウスは、当時のシカゴ社会学の調査および社会改良運動の拠点となっていた。「シカゴ大学が設立されるまでは、ハル・ハウスが社会改良主義者、ビジネスマン、牧師、ジャーナリスト、弁護士、あるいはソーシャル・ワーカーといった社会事業に関心をもつ人びとにとって、センターとしての役割をはたしていたということである」[同書：22-23]。

セールメント運動自体が実践的な活動であり、その活動拠点とともに歩んできた当時のシカゴ社会学が、経験主義的な調査を重んじたものであることがわかった。シカゴ社会学の実証的な研究の土台づくりに、ハル・ハウスの存在が密接にかかわっていたが、ハル・ハウスとシカゴ大学の関係が微妙になったこともまた、経験主義的な調査を進める社会学者とセールメントの実践者との立場の相違に起因していた。著者はこのハル・ハウスとシカゴ大学との紧张関係について、中心人物であったアダムス（J. Addams）とシカゴ大学との感情的なもつれではなく、以下のような事情があったことを説明している。

ハル・ハウスの人たちは、コミュニティの欲求に応じる資料の収集を助け、また社会学的、研究や分析を支援することに、なんのためらいもしませんでした。しかし、ひとたびそれが改良の意図を失い、コミュニティやその住民の生活がたんなる観察の客体としてとらえられようとしていったとき、激しい拒否の姿勢をしめしていくことになる。……観察者によって振り回されたり、その道具ではないことを考えるならば、当然の帰結であった[同書：31]。

そして、セールメント運動とかかわってきたシカゴ社会学の実証的な研究が、その後の
パークやトマスによる「客観性重視の態度」へと移行して、ソーシャル・ワークとの新たな関係が築かれてゆく状況を提示して第1章が閉じられる。

第2章および3章では、シカゴ社会学第二世代を代表するトマスの視座やパークの論議した概念を取り上げられる。この第二世代の登場によって、「社会改良主義的」な流れが「経験科学的研究」へと転換されて、同時に実証と理論の構築に向かう方法論が示されるようになった（同書：41）。「W・I・トマスにおける視座の展開」（第2章）において、数々のモノグラフのなかでも、初期のシカゴ・スタイルを確立したと評価されているトマスとズナニエツキ（Thomas and Znaniecki, 1918-1920）による『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民（The Polish Peasant in Europe and America）』と題された研究の概念的フレーム形成の背景などが説明される。ここでまとめられた「四つの願望の理論（theory of the four wishes）」の原型とは、「(1)新鮮な刺激やあたらしい経験を求める欲求（desire for new experiences, for fresh stimulation）、(2)認知を求める欲求（desire for recognition）、(3)支配を求める欲求（desire for mastery）、(4)安全を求める欲求（desire for security）」である。これらはそれぞれ、(1)は「あたらしい状況への関心という性向をさし」、(2)に「異性からあらわれた反応や、一般的な社会的評価、あるいは自己の成果にたいする賛辞といった欲求がふくまれる」（同書：46）。（3）には、「所有権から政治的専制にみいだされるような権力への欲求があげられ、それには憎悪本能にもとづくもの、あるいは野心によって高められるものも入る」。（4）は「平穏への願望や恐れにもとづくものとされるが、個人的および社会的な禁忌に絆かされているものも、否定的な意味でこれに含まれるとされる」（同書：46）。

上記の類型化のもとになるデータが広範な「生活史」の記録であり、そのとらえ方は、以下のように説明されている。

トマスとズナニエツキがポーランド農民の分析にあたって、「生活史」を基本的な方法として使用し、「個人の生活記録をできるだけ完全に揃えれば、それは完璧なタイプの社会学的資料を構成すること」といっているのは、資料の取捨選択とデータの分類をすすめるにあたって、「諸要素にもと込んで完全な具体的なデータを分析し、それらの諸要素を体系化し社会的実事を定義し、社会的法則を定立する」という方法論上の要請にそうものとみたからである（同書：50）。

トマスの「民族心理学」への傾倒は、当然ながら生活史のなかの主観的な世界へも注目することになり、「主観的側面と客観的側面を組み込んだ概念図式」という方法論の適用をしていた。

次の「文化葛藤とバーソナリティ」（第3章）で取り上げるパークの視点も、トマスと同様移民の内面的な世界への関心が強く示されている。この章では、パークのとらえ
た「文化特性」や異なる文化的「接触」、「文化繭」さらに「マージナル・マン（marginal man）」の概念などを取り上げた。パークの観点は個人の主観的世界への偏りがあることを、著者は以下のように表現している。

いずれにしてもパークがマージナル・マンを語るとき、それはつねに個人のメンタリティの次元において問題とされており、マイノリティ団体にたいする歴史および社会構造の視点からの分析が希薄なことは否定できない。というより彼の視線は、文化とパーソナリティに集中しているといってよい。パークはそこから大きく踏み出すことはなかった[同書：75]。

マージナル・マンの考察のなかでパークは、二つの文化のどちらにも完全に属さずに葛藤を引きずるタイプとして、「移民」だけでなく「人種の交配によって生まれた混血児」を同様にとらえた。パークとトマスに関しては、以後の第2部において、さらに詳細な説明がある。

3 「人種と文化」

第2部は、「人種と文化」をテーマとした四つの章で構成されており、本書の主要な位置づけにある。考察対象となったトマス、パークともに人種の「偏見」が簡単には払拭することができないと指摘してきた。「移民と偏見の地平」（第4章）では、19世紀のアメリカ合衆国で移民が多様化した状況や、「人種や民族」の多様化にともない顕著となった移民の排斥運動などを取り上げた。1830年代後半のアイルランド人の排斥から、19世紀後半から20世紀前半の4半世紀にかけてのアジア人、特に中国人や日本人に対する差別的な政策や社会情勢を概観した後に、トマスの視点が明らかにされる。著者は「トマスが多文化主義的な立場をとっていたとみるとすれば、あきらかに飛躍した見方となる」[同書：99]、と述べながら、トマス[Thomas, 1908]の論文「西洋に対する東洋の意義(The Significance of the Orient for the Occident, American Journal of Sociology, Vol. XIII, No.6)」のなかに「西洋至上主義」ではない文化相対主義的なスタンスを見出している[13]。トマスは、「なんら偏狭な先入観をもつことなく、文化的、歴史的な分析の視点を持ち込み」[同書：98]、「……人種関係を論じるにあたって、人種の優劣論に立つことはなかった」[同書：102]。

「人種の壁に向けて 一同化をめぐるR・E・パークの思考と実験」（第5章）では、トマスに続き、再びパークの視点が焦点となる。パークがジャーナリストであったことはよく知られているが、「コンゴ改革協会（Congo Reform Association）」の書記の仕事に就いて、コンゴにおけるベルギー国王の悪政や取奪の現実を例証した論文などでも、一貫し
た姿勢が示されている。それは、「人種と文化葛藤」への関心に基づくアプローチであった。コンゴ問題だけでなく、その後7年間のタスキーギにおける事業を通じて、黒人問題と深くかかわろうというにいたった。自分をタスキーギ学院に招請したブッカー・T・ワシントン（Booker T. Washington）との出会いは、双方にとって大きな意味があったようである。

パークが、「社会学は経験でなければならず、また実験でなければならない」と強調するとき、そこに〈なすことによって学ぶ〉（learn by doing）というワシントンが好んで使う言葉が引き合いにさされてくるのは、彼の立場が、基本的にこうしたプラグマティックな思考にささえられていたことをしめしているといってよい[同書：113]。

アメリカ南部の黒人の道路に関して、「黒人は、ほとんど真の意味で、もはや余所者（alien people）ではなかった。……もちろん彼らは市民ではなかった。……より正確には、おそらく彼らは同化されたというよりは、教化されたといえるのかもしれない」[同書：121]、とパークは述べている。しかし、著者は次のライマン［S.M. Lyman, 1992. Militarism, Imperialism, and Racial Accommodation］の言葉に、「応化」の過程にこだわりながらも、単純に同化主義者とは限定できないパークの観点を捉えた。

教化を越え、そして近代の産業社会にふさわしい同化へ向けて歩をすすめていく奴隷の解放には、あたらしい社会秩序へのアメリカ黒人の一体化（incorporate）が真になされなければならないとパークはみていた［同書：122］。

「移植された文化」（第6章）では、トマスとパークによるアメリカニゼーションに関する研究などが取り上げられる。この研究は1918年から1919年にかけて実施されたと言われており[同書：131]、その数年後にパークとバージェス編纂の『社会学の科学入門（Introduction to the Science of Sociology）』やパークとミラー［Park and Miller, 1921］による『移植された旧世界の諸特徴（Old World Traits Transplanted）』が刊行された。著者は、このパークとミラーによる著作のなかから以下の一節を抽出している。「世界のさまざまな文明は、対抗状態にあり、いかなる国も能力が弱まれば、実態としても、また経済的にも崩壊に導かれることになる。アメリカにとどまる移民を同化させたいというわれわれの願望は、われわれの組織の実践的な部分に彼らを組み入れることを意味する」[同書：137]。したがって、移民は同化に向かうべきであるが、移民にとってという意味合いだけでなく、ホスト国であるアメリカ社会にとって移民の同化が必要となっていた。『社会学の科学入門』のほとんどの章で「同化」について詳しく述べられており、その意味は「個
人や集団が、他の人間や他の集団の記憶、感情、および態度を習得し、そして彼らの経験と歴史を分かち合うことによって獲得する相互浸透と混合の過程であり、共通の文化的生活において彼らと一体化することだ。 [同書：142]。

しかし、パークとミラーは、文化の一元論としての同化だけでなく、一つの国家（この場合はアメリカ合衆国）内の文化的多様性についても考慮しており、以下のように述べている。「われわれは、単一の文化のために懸命になるべきなのか。あるいは、多様な文化のために力を尽くすべきなのか、それとも移民の諸特徴や彼らの組織の持続化は、この多様性を完遂することになるのだろうか。このことは、われわれの国家生活の理想的な性格と関連している」 [同書：138-139]。実際、トマスとパークは移民の流入による文化的な多様性の進展を直視していたが、今日の多文化主義的な理念と一致しているわけではない、著者は以下のように説明している。

……それぞれの民族的、文化的な拠点として持続性をしめしていく移民の組織が、アメリカ社会への参加をはたしていくかぎり、けっして同化にとって障害になるとはみていなかった。しかしそれだからといって、その認識が移民の個々の文化的な多元性の容認につながるものであったかといえば、かならずしもそうではない [同書：140]。

第7章では、「有色人種」にたいする差別や偏見などについて当時の状況を説明した。そのなかで1924年に成立した「排日移民法」やそれ以前にみられるアジア人にたいする差別の問題と関連して、「人種関係周期論（theory of the race relation cycle）」を唱えたパークの人種問題への見解などが考察される。「排日運動」を含めて、アジア人にたいする差別が顕著であったアメリカ合衆国の時代的な背景について、著者は辻内（1999）を参照にした。「20世紀の初頭に問題になったのは、〈人種〉ではなく、国民的な統合のあり方であった」。そして、辻内は、「主としてヨーロッパ系移民のアメリカへの同化－アメリカ化－という国民化－であって、非白人の同化ではなかった。いがかえればアメリカの国民的な再定義が行われようとしていた当時、有色人種を二級市民としたり、そもそも彼らに市民権を付与しないことはむしろ自明の前提だった」 [同書：173]。

また著者は、パークが「排日移民法」の成立に反対ではなかった点に注目して、『社会学雑誌』（「シカゴ大学社会学教授パーク博士の印象」、1926）のなかの古坂が紹介したパークや古坂の説明を引用している。

ちょうど太平洋岸の「人種関係調査」を終えて、その分析にはいっていたパークは、古坂との対話のなかで、東洋人のばあいには皮膚の色と身体的な特徴があるかぎり偏見がなくなること、またそこに自己意識と人種意識が存在するかぎり、社会的距
離や境界がなくなるはずがないことを、常日頃から率直に語っていたという。また「排日移民法」にたいしても、パークがこれに賛成の態度をとっていたと述べている [同書：149]。

パークは日系移民の問題に深い関心を示しており、「太平洋岸における日系移民」を対象とした人種関係の調査を実施している。この人種関係の調査は、事実上「排日移民法」と関連した「日本人調査」であり [同書：154]、パークが自身の理論「人種関係周期論」を検証する意味をもっていた 16)。

4 「戦後のシカゴ学派」

第 III 部「戦後のシカゴ学派」は、「シカゴ社会学の戦後」（第 8 章）と「現代都市とエスニック－多文化主義と人間生態学モデルの再検討」（第 9 章）の二つの章から成る 17)。第 8 章では、第二次大戦後のシカゴ社会学が概観される。例えば、大戦後から 1960 年代初期にかけてのシカゴ大学社会学科の路線と権力抵抗に基づく人間的軸線について、アボットの著書（A. Abbott. Department and Discipline: Chicago Sociology at One Hundred, 1999）などを参照しながら、考察がなされた。また、「第二のシカゴ学派？戦後アメリカ社会学の発展 (A Second Chicago School? The Development of a Postwar American Sociology, 1995)」の論点などの紹介もある。ファイン [Fine 1995: 9] 同様、著者はシカゴ社会学における大戦後のひとつの転機を、中心人物が去っていった 1951 年から 52 年ごろととらえた。なぜならば、この時期に「W・F・オグバーンと E・W・バージェスが退職し、H・ブルーマーはカリフォルニア大学（パークレー校）に移り、52 年に L・ワースは亡くなる」 [同書：182]。さらに、「……これまでシカゴ・スタイルの思考をつなぎとめていた核ともいえる人物がいなくなったために、すでに伏ししていた路線の対立が顕在化していったことであり、また同時に、路線の選択をめぐって増幅していた人間関係のものそれ、この世代だけでなく、若い世代を葛藤に巻き込みながら進行していったということである」 [同書：183]。ここでは、特に第二次大戦後に衰退した時期を迎えた、といわれるシカゴ学派の実情が述べられる。特に、以下のジャノヴィッツ [Janowitz, 1970] の回想は、その様子を象徴的に語っている。

わたしが再びシカゴ大学のキャンパスに足を踏み入れたのは 1961 年のことだった。だが社会科学棟の三階フロアや廊下には、やはり学問的亡霊が住みついていた。そこでは、どれが過去の知識でどれが現在にも役に立つ知識なのか、その区別さえつかないといった状況もみられた。また過去であるがゆえに、ただそれをやみくもに葬り去ろうとする試みさえみられた [同書：181]。
また、この章では質的なデータを主要な分析対象とする調査、スコノグラフィックなメソドロジーと「シンポリック相互作用論」の適用などが、いかに継承されてきたかについて検討している。その中で、プラット [Platt, 1995] が実施した第二次大戦後から1960年代初期にかけてのシカゴ大学における方法論的な特徴に関するデータが引用された。プラットは、シカゴ大学の博士論文で採択された調査方法を、「数量的分析手法」、「質的分析手法」「混合的手法および分類不可」の三つのカテゴリーに分類して分析、また資料収集の方法について、「センサス」、「標本調査」、「インタビュー」、「フィールドワーク」を含むいくつかのカテゴリーに分けて解析した。結果として、「質的方法は、一般的にいわれているように、けっして戦後シカゴ社会学の支配的な調査法であったわけではない。また質的方法やシンポリック相互作用論への同調や、これを中心とする方法論的な取扱が、間立ったかたちでみられたわけではない」[同書：188]。

パークは人の「移動」をキー概念に、人種や文化的な直接的な接触とそれにともなう「同化」というプロセスを考察してきたが、このテーマ自体が今日の都市エスニシティのイシューと密接にかかわっている。第9章では、この同化から多文化主義的な観点への移行に注目して、ダーロッチとマーストン [Darroch and Marston, 1984] の都市分析を取り上げた。この論文では、同化と文化的多元主義の論議の後に、集住や凝集（segregation）などのエスニック集団の居住特性という空間的な分布の分析に基づいて、生態学モデルが再検討されている。また都市エスニシティとして下位文化が生成された状況について、著者は以下のように指摘した。

エスニックの居住パターンが、生き生きとしたエスニックの下位文化を生みだし、それを持続していく役割をはたしていることに関心が向けられているといった方がよいくらい。ダーロッチたちが注目しているのは、こうしたエスニックの空間的パターンが、同化を制約しているというより、むしろ文化的多様性の維持の基盤となっていっているとする立場である[同書：214]。

また、「エスニックの居住地の凝縮性」から、多文化主義のアプローチとして、フィッシャー（C.S. Fischer）の理論との関係を考察している。ダーロッチらが、「フィッシャーの理論を高く評価」した理由は、「……アーバニズムの影響がけして一方向のものではなく、また下位文化のあいだに生まれる緊張にたいする認識をもちこんだところに、都市の多元主義の基礎とするフィッシャーのモデルの性格があり、またここに旧い同化主義者の観点と一線を画する特徴があるとみるものである」[同書：218]。

上記の論文における仮説の検証には、さらなる実証的なデータが必要となることを示唆しながらも、本章の結論として著者は以下のように評価した。
……少なくとも過去の生態学的分析の生んだ成果を簡単に投げ捨てるのをせず、その研究の遺産と継続性のうちに都市のエスニック多元主義にたいする検証をすすめていこうとする試みに、ひとつの貴重な挑戦と理論的な生産性が広くされていることは否定できない [同書：221]。

5 シカゴ社会学の現代的意味

文化的一元論からの脱皮

本書の主要な考察対象となったトマスやパークは、移民問題への関心が非常に高く、今日のグローバル・マイグレーション時代における都市エスニシティ研究と深くかかわる課題について、実証研究に裏づけられた理論構築をしていった。どちらも一貫して現実社会と対峙して、社会事象を捉える姿勢を貫いていた。ことに移民の同化の問題は、19世紀後半から多くの移民を受け入れた国家において重要なテーマであった。当時トマスの示した生活史の扱い方やパークの論説した同化やマージナル・マンなどの概念を含めて、その方法論や理論は今日の都市エスニシティ研究への影響があるだけでなく、人の移動の活発化とともに今日的なテーマとしても扱われる、と解釈することもできる。特に移民のホスト社会への適応を描写するにあたって、同化理論を扱う際には現代でもパークらの定義に負うところは大である 18）。「同化理論には、ホスト社会のマジョリティと異なる文化集団が自身の文化遺産を放棄してホスト社会の規範を修得すべきであるという観念が背景にあり、ホスト社会の同質性を維持していく目的が提示されている上、ホスト社会自体が同質的であるとの前提に基づいている」 [水上 1997: 206]。実際、同化理論や同化主義に対する批判が高まる以前には、ホスト社会の同質性に対する疑問やエスニック・コミュニティなどの下位文化の存在に対する理解が低い状況にあった 19）。したがって、同化の理論や調査は、主に異文化を形成していると認識された移民等のマイノリティ集団を対象にしてい。そこではホスト社会のマジョリティの変化にたいする言及は希薄であり、その意味では文化的一元論の展開となる。1950年代半ばまで同化が支配的概念であったが、その後同化に代わる概念として統合 (integration) が使用されるようになった [Lewins, 1988: 858]。1956年ハバナでのユネスコの会議において、ポリー [Borrie, 1959: 96] が同化が単一の方向を表すのに対して統合は移民と非移民双方の理解と文化変容によって規範に対する適応過程であると述べ、二元的過程であることを強調していた。

移民がホスト社会において文化変容を遂げるように、ホスト側も当然何らかの変化をともなう。しかし、統合の概念を適用するまでもなく、移民の同化自体が当然ホスト社会側の対応と関係する。例えば、ホスト社会の差別や偏見が厳しく移民が社会参加を限定されてしまう場合には、同化の進展自体が妨げられる。ゴードン [Gordon, 1964: 63] は、
移民がホスト社会で活動するためには、経済、政治、生活レベルで偏見がないことを前提条件としてあげた。ホスト社会側の受容を含めた変化が理解されるようになり、下位文化にたいする認識も高まると同時に文化的な一元論が批判対象となっていった。本書で取り上げたダーロッチとマーツトの論文も多様主義的な流れを踏まえて、「都市の規模」とエスニック集団の「人口動態」の関係を分析している。そのなかで、エスニック・コミュニティが集住した状況を多元主義の指標（同化の失敗）という図式を用いて、凝縮と拡散を対比した都市エスニシティの形態を示した。さらに下位文化理論の関係や人間生態学が再考されているが、集住あるいは凝縮の継続という一つの方向が強調されており、もう一方で発生しているエスニック・コミュニティの拡散やインター・マリッジ（inter-marriages）の増加と関連する多元主義的考察はあまりなされていない20）。彼らの設定した課題は、都市の規模とエスニック集団の居住パターンの関係ではあるが、都市エスニシティの特徴を示すにあたっては、凝縮と拡散の同時進行による動態的な過程をとらえる視点からの考察もあり得るのでないだろうか。

ノスタルジー？としてのシカゴ社会学

本書では、トマスやパークを中心に方法論的なアプローチおよび視座を含めたシカゴ社会学の世界と伝統を考察した。第 III 部、ことに 9 章が直接的に今日の都市エスニシティの課題とかかわるが、第 I 部から第 II 部への流れと比較すると、幾分控えめに扱われている。これまでのシカゴ社会学の都市エスニシティに関連した研究が、現代社会の課題といかに直接かかわるかということを強調するのではなく、著者は禁欲的な姿勢で正確さを追求した論旨を展開してきた。そのため、シカゴ社会学の現代的な意味については、かなりの部分で読者自身が読み取る必要に迫られる。しかしながら、

本書は、その表題にもとづかれているように、シカゴ社会学が時代との応答のなかでしんしてきた理論の展開をとおして、こんにちはわれわれが直面している課題から、現代都市のかかえるエスニシティ問題を切り直していくことを意図したものである。

……けっして新しい視点から問題を組み替えたり解釈しようと試みているわけではない。むしろ重視したのは、シカゴ社会学のうちに提起されてきた問題性が、どのような時代の要請を受けとめ、また現実的な意味をもたらしたのかを、その理論展開から再認識してゆくことにある [同書：226]。

したがって、上記の「あとがき」に提示された目的に従っており、「なによりも既存の資料と文献をできるかぎり忠実に読み込むこと」という著者の姿勢のとおり、原典を丹念に読み解きながら考察されている。シカゴ社会学の伝統として、エスノグラフィーや質的な資料の収集などが強調され、そのなかで数々の調査データに裏付けられた社会学理
論が構築されてきた。本書はこの辺りの事情を踏まえており、『第二のシカゴ学派？』（1995）や『シカゴ学派社会学の伝統（The Tradition of the Chicago School of Sociology）』（1998）にもみられるように、その伝統にそったエスノグラフィーそのものを提供するのではなく、学説史としての重貴な意味が込められている。著者は単にセツルメント運動とのかかわりからシカゴ社会学の発展を振り返って時系列に説明したのではなく、現代的な意味を模索してきた。そのひとつがダーロッチとマーストンの論文から、フィッシャーの下位文化論を通して示唆した都市エスニシティ分析の方法論である。


アボットやガジアノは、1951年から52年にかけて実施されたシカゴ大学におけるセミナーの討論を紹介して、大学内部の軸跡などを分析した。このセミナーの議論は、第二のシカゴ学派の萌芽ではなく、第一期の創造についてであり [Abbott and Gagiano, 1995: 242]、伝統へのノスタルジー的な主張があったことを提示して学説史のなかに組み入れている。しかももう一方では、混沌とする現実世界の内実を動態的に描写することを試みて、実証的な立場からとらえた都市エスニシティに関する基礎理論の構築および今日に至るまでの影響をも含めて、シカゴ社会学の現代的な意味を考えることもできる。パークらの時代の伝統を過去の遺産としてとらえるか、今日の意義を模索するかというそれぞれの観点の相違があるのだろう。しかし、半世紀を経たポスト・パークの時代のなかで、評者自身も広範なフィールドワークに象徴化されただけでなく、経験主義的な研究を士台としたシカゴ社会学の理論構築に、ひとつの社会学的ロールモデルを見出しているひとりなのである。
注
1) 第一次大戦から1930年代半ばまでの20年間、アメリカ社会学の歴史は、大部...
いして冷淡で敵意をもち、また軽蔑的ですらあった。しかしながら共通の社会的状況の冷徹な論理が、いまや社会学とソーシャル・ワークにたいして、両者に欠くことのできない相互依存性を承認することになり、またこれに作用している」[同書：33]。

9) バークが、人道主義的なポーズを激しく攻撃したことに関しては、いくつかのエピソードが紹介されている[同書：31-32参照]。

10) トマスは、シカゴ社会学の「第一世代とその形成をともに担いながらも、けっして彼らと歩調をそろえていたわけではなかった。その意味では、まさに E. フェアリスの指摘するように、トマスはシカゴ社会学にとってだけでなく、アメリカ社会学の第二世代にぞくしていたといえてよい」[同書：40]。


12) バークの文化の概念にかかわるとき、欠くことのできないのがパーソナリティの問題である」[同書：60]。

13) しかしながら、ここで著者は同論文ののなかの朝鮮の論議に基づき、トマスの東洋に対する理解が低かった点にも注目している。

14) バークの死後に発見されたフィスク（Fisk）大学時代の彼の講義に書き取らせたバークの自伝的な手記のなかで、以下のように語っている。「わたしの社会学への関心は、ゲーテの『ファウスト』に由来している。ファウストが、本には飽き飽きして、世界、人間の世界をみたかったことを、覚えているでしょう」[Park, 1950: v]。

15) ブッカー・T・ワシントンはタスキング学院の設立だけでなく、黑人起業家の支援活動を展開していた。バークがタスキングに参加していた時期に、ワシントンはもう一人の黒人リーダーであるデュポイスと激しく対立しており、その後新たなことになる。その背景には「黒人インテリ・エリートが、自分たちに都合のいいデュポイスのヴィジョンを誇示することにあった。ワシントンの不人気、NAACP（全米黒人地位向上協会）の反対、同化が、黒人共通の目標として最重要事項となったことを意味していた」[Nelson, 1988 = 1990: 40]。

16) 「この調査に、バークにとっては、日系移民にたいする人種関係を対象とした応化合の研究という意味」をもち、「……たんにバークの経験的な調査計画にかかわる作業仮説と、具体的な調査の手法を提示した人種関係調査のプロポーザルにあったというだけでなく、バークの理論の実践化という意味をもっていたということである」[同書：161]。

17) 第二次大戦後のシカゴ社会学に関しては、本書の第8章で参照した『第二のシカゴ学派？——戦後アメリカ社会学の発展』が同様のテーマを取り上げているが、特定の時代に集中した論議が中心になっている。1892年から1940年にかけての時代と比較すると、1940年代中葉から1960年にかけてシカゴ学派のモノグラフィックな作品が生まれていないが、編著者のファイン[Fine, 1995]らはこの時期に「第二のシカゴ学派」が存在していたという見解を示した。

18) 二十世紀前半から少なくとも1950年代半ばまで、北米を中心とした移民のホスト社会適応の
調査研究において同化の概念が主要な役割をはたしてきた。シモンズ（Simons, 1901:790）は、二十世紀初頭、歴史やその他の社会科学において社会的アシミレーション（social assimilation）に対する関心が現れてきた、と述べている。また、スパイロ（Spiro, 1955）が、1950年代半ばまで社会学者がマイノリティ集団や人種間における社会関係に注目していたことを指摘して、アメリカにおける個々のエスニック集団のケースを参照にアカルチュレイション（acculturation）の特徴を考察している。

19) 同質性の崩壊は、国家の安定をゆるがす要因になると考えられてきた。著者が指摘しているように「移民の多様化が、アングロサクソン系の文化と制度を中核として形成された既存のアメリカ社会にとって、不安定要因として受け止められたことはいうまでもない」（秋元, 2002: 84）。トマスやパークの時代だけでなく、シュレージンガー, Jr. (1991) なども同質性の崩壊が国家の危機となることを警告しており、このような議論は今日でも継続している。

20) インター・マリッジについて、ゴールドン（Gordon, 1964）の同化のサブ・プロセスに準じて範疇化すれば、「婚姻的同化（marital assimilation）」となる。しかしゴールドンは、同化の進展に向かって、マイノリティ集団のメンバーがジャクソビルと結婚するケースを想定しているが、ここではジャクソビル集団以外の異なるエスニック集団間の婚姻をも含む。

21) ズナエッキは、以下のように語っている。「昔の多くの社会学者たちは、たよりにならない程のわずかな事実にもとづいて、堂々たる見解を構築をこなした一者かもそれ量を成に前年に崩壊したのであった一けれども、われわれは、なまけ材料の山を積みあげて、そこでとべに、みすぼらしいわずかばかりのおずおずとした理論を、なんとかしてうまくのけてやろうとしているのである。われわれはこの手続を科学的慎重さのせいにすることによって、これに威厳を与えるとするが、実はほとんどの場合、それは、明らかにもっとも適当な処理の仕方をすることができないからにはならない」（Znaniecki 1936=下田, 1971: 127）。

文献リスト


辻内鏡人 1999「多文化パラダイムの展望」油井大三郎・遠藤泰生編『多文化主義のアメリカ——揺らぐナショナル・アイデンティティ』Pp.59-85. 東京大学出版会